

## T. ヴェブレン対J.B. クラーク / I. フィッシャー の資本論争

著者	田中 敏弘
雑誌名	経済学論究
巻	68
号	4
ページ	1-22
発行年	2015-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/13435">http://hdl.handle.net/10236/13435</a>

# T. ヴェブレン対 J.B. クラーク / I. フィッシャーの 資本論争

## The Capital Controversies : T. Veblen vs J.B. Clark / I. Fisher

田 中 敏 弘

The purpose of this paper is to shed new light on the capital controversies, in this case, Thorstein Veblen vs. J.B. Clark & I. Fisher. In this paper, the author emphasizes the original views of Veblen. This paper is a sequel to a previous article in the *Journal of Economics of Kwansai Gakuin University*, (*KEIZAIGAKU RONKYU*, vol. 67, no. 3, Jan. 2013) entitled “The Capital Controversies; Böhm-Bawerk vs. J.B. Clark.”

Toshihiro Tanaka

JEL : B31

キーワード：資本論争、T. ヴェブレン対 J.B. クラーク / I. フィッシャー、有形資産と無形資産

Keywords : Capital controversies, Thorstein Veblen, J.B. Clark, Irving Fisher, “tangible assets”, “intangible assets”.

### I まえがき

筆者は、J.B. クラーク研究を手がけ、アメリカ新古典派経済学の成立を J.B. クラークに求めた。これを基礎としつつ、資本理論に焦点を絞り、まずベーム-バヴェルクとの資本論争（『経済学論究』第 67 巻第 3 号、2013 年 12 月）を取上げた。これに続いて、今回は T. ヴェブレン対 J.B. クラーク / I. フィッ

シャーの論争を検討することにしたい。<sup>1)</sup>

ヴェブレンは J.B. クラークとフィッシャーを「現代経済学」の最初の代表とみなしている。彼のこの批判は一般的なものであった。ただし、彼の批判は、「クラーク教授の経済学」(*The Quarterly Journal of Economics* vol. XXII, Feb. 1908. *The Collected Works of Thorstein Veblen* vol. VIII (以下, C.W. と略す)、クラークの『経済理論綱要』(*Essentials of Economic Theory*) の書評、1907、およびフィッシャーの著書二点に対する拡大された書評——「フィッシャーの資本と所得 (1908 年, C.W. X.) および「フィッシャーの利子率」(1909 年, C.W. X.) に現われる。

『経済学理論綱要』の書評でさえ、ヴェブレンは一般化してクラークの『富の分配』(1899 年) に言及して、「クラーク氏の著作を、クラーク氏固有の学説、すなわち主流から離れたものとしてではなく論じている」。<sup>2)</sup>

ヴェブレンは、「クラーク氏の資本学説はある種の形式的相違はあるものの、……フィッシャーあるいはフェッター氏の学説と本質的には異なる」<sup>3)</sup> と言う。ドーフマンによれば、「同様に、ヴェブレンは、E.R.A. セリグマンへの手紙で、彼の有名な論文「限界効用の限界」を『フィッシャー氏の書物や最近二、三年のうちに出版された同学派の他の著作によって一部示唆され、あるいは少なくとも挑発されたものと述べている」。<sup>4)</sup>

---

1) 筆者のクラーク研究については、次のものを参照されたい。

1. 『アメリカ新古典派経済学の成立、J.B. クラーク研究』(2006 年、名古屋大学出版会)
2. クラーク『富の分配』、田中敏弘・本郷亮訳、近代経済学古典選集、(2007 年、日本経済評論社)
3. 『アメリカ経済学史研究——新古典派と制度学派を中心に——』(1993 年、晃洋書房)
4. 『アメリカの経済思想——建国期から現代まで——』(2002 年、名古屋大学出版会)
5. なお、田中敏弘編著『アメリカ人の経済思想——その歴史的展開——』(1999 年、日本経済評論社) も参照されたい。

2) Veblen, C.W. VIII, p.182.

3) Veblen, C.W. p.194.

4) Dorfman, J. "New light on Veblen", In *Thorstein Veblen : Essays, Review and Reports*, Clifton, NJ : A. M. Kelley. pp.232-35.

## II ヴェブレンの進化論的科学としての経済学と新古典派経済学批判

ヴェブレンの新古典派経済学批判は、それが進化論的科学としての経済学と根本的に異なる点を指摘する。ヴェブレンの前提の第一は、累積的因果論的経過という概念である。<sup>5)</sup>

ヴェブレンは、内生的過程の説明を欲する。そこでは、ある時点で現存する制度構造は、やがて諸個人の決定を制約するが、諸個人の行為は、その制度構造を変化させ、一連の新しい条件と一連の新しい決定と行為に導くとされる。これは過程が進行するにつれて、ある時点での行為者とその環境との両方を最後の過程の結果として累積的に変化させる、目的への手段の累積的適合過程である。<sup>6)</sup>

個人は行為者であると同様に、「最後の過程の結果」であるから、個人は根本的な分析単位ではない。経済行為の適切な理論は、個人によって引き出され得ない。制度が中心的な因果的役割りを果すのである。

「経済生活では、人間の行為の他の路線におけると同様に、慣習の様式と行為と関係が成長し、慣習によって制度構造に慣れる。これらの諸制度とそれらに含まれる通常概念とは、それら自体の指図する慣習の力をもつ。」<sup>7)</sup>

適切な経済理論は、個人の働きと制度上の構造との間に時間に関して相互に決定する相互関係を説明せねばならない。その説明は歴史的に固有のものでなければならない。なぜなら、「慣習的關係は制度的性格のものであり、制度上の機構が変化するにしたがって変化する」<sup>8)</sup>からである。

これは、暗黙のうちに、すべての社会に普遍的に適用できる説明が受け入れられないことを示している。

ヴェブレンによる新古典派経済学批判——「なぜ経済学は進化論的科学でないのか」——において、ヴェブレンは、その例として、クラーク、フィッシャー

---

5) Veblen, *C.W.* VIII, p.176.

6) Veblen, *C.W.* VIII, pp.74-75.

7) Veblen, *C.W.* X, p.143.

8) Veblen, *C.W.* VIII, p.242.

以外に、マーシャルおよび J. N. ケインズを、時には、オーストリア学派と歴史学派も共に、同一視している。この批判は、彼がその基礎だとしている三つの相互に関係する特徴に焦点を合わせている。すなわち、それらは、自然法と静態均衡、分類学、および快楽主義的目的論である。要するにヴェブレンは、新古典派経済学の特徴として、経済を「最高人間福祉の定められた目標に一致した均衡」諸力を強調する普遍的に適用可能な自然法とのかかわりがあると把握している。

## 1. 自然法と静態均衡

経済学の自然法的基礎を述べて、ヴェブレンは、アダム・スミスの例をあげている。<sup>9)</sup> というのは、スミスにとっては、「経済人は自然のメカニズムの一部であり、彼の利己主義的な交易は、事物の自然的成りゆきのなかで、一般的な福祉が達成される手段に過ぎないからである。」<sup>10)</sup> 自然の法は、ヴェブレンにより引用された箇所において、クラークが限界生産力法則について主張するように、普遍的に適用されうる。

「われわれは、くわをなくすと確かに悪い影響を受け、それが戻ればいかによい影響を与えるかをただ確かめようと努める。この真理……は経済学に普遍的に適用しうる。というのは、原始人も文明人も、彼らが使用する道具の固有の生産力を評価しなければならないからである。」<sup>11)</sup>

こうした自然法の結果は静態均衡である。ヴェブレンは主張している。経済学は経済均衡の諸条件に満足することになる。

「経済生活の動きと過程は軽視されないが、しかし純粋理論は動学を扱わず、問題の静学を扱う。この科学の具体的な主題は経済生活の過程である。しかし、……動学でのこの仕事の目的は、過程の結果の決定と配列である。……過程は、それが向かう傾向、あるいは向かうはずの均衡によって評価されるのであり、その逆ではない。過程の結果は探究が静止する点

---

9) Veblen, C.W. VIII, p115.

10) Veblen, C.W. VIII, p.193. n.8.

11) J.B. Clark, *Essentials of Economic Theory*. 1907. Ner York. Macmillan, p.43.

である。」<sup>12)</sup>

ヴェブレンの主張は過大にひびくかもしれないが、クラークの著作からの次の引用は、そうでないことを示唆していると思われる。

静態における分配に関するクラークの決定的記述は、『富の配分』（1899年）の冒頭でイタリックで現われている。

**「自然法則が自由に作用する場合には、生産的機能に与えられる所得の分け前は、その現実の生産物によって評価されるのである。言い換えれば、自由競争は、労働に対して労働が創り出すものを与え、資本家には資本が創り出すものを、そして企業者には調整機能が創り出すものを与える傾向をもっている。」**<sup>13)</sup>

クラークにとって、「自然法」は「静態法則」にほかならない。

『国富論』出版に続く世界の経済学は、動態問題よりも静態問題を扱った。それは、財の『自然』価値を決め、労働の自然賃金と資本の利子を支配する法則を得ようと求めた。このように使用された『自然的』（natural）という用語は静態と同一であった。もし価値、賃金および利子の法則がこのとき正しく述べられていたならば、それらの法則は、すべての変化と攪乱がない場合に、現実の価値、賃金、および利子が究極的に一致する標準を提供したのであろう。」<sup>14)</sup>

「静態的」あるいは「自然的」法則の力は永続的である。「社会を常にその自然的形態に引き寄せる静態的影響力はいつも根本的であり、進歩はその影響力を抑制する傾向をもたない。」<sup>15)</sup>

## 2. 分類学 (Taxonomy)

次に第二の特徴である分類学を取り上げる。ヴェブレンによれば、新古典派経済学は分類学である。静態的均衡に力点がおかれる。すなわち、経済生活の

12) Veblen, C.W. VIII, p165.

13) J.B. Clark, *The Distribution of Wealth. A Theory of Wages, Interest and Profit.* New York. and London : Macmillan, 1899. p.3. 田中敏弘・本郷 亮訳、『クラーク富の配分』、2007年、日本経済評論社。p.5.

14) J.B. Clark, *Essentials of Economic Theory, op.cit.*, pp.v-vi.

15) J.B. Clark, *ibid.*, p.198.

過程で偶然作用する働きや力である。この方法の結果は、せいぜいのところ、事物の正常な関係に関する論理的に一貫した諸前提の一体——経済分類学の体系である。<sup>16)</sup>

別のところでは、ヴェブレンは、自然の秩序をなすとみなされるはんちゅうの合理的体系のもとで、そのデータを包摂する目的をもった分類学の理論的目的——定義と分類と記述している。

### 3. 快楽主義的目的論

第三の特徴として、経済は常にすべて可能な世界のうち、最高に向かう自然秩序が考えられている。この伝統的な目的論の概念に加えて、ヴェブレンはまた、経済理論の演繹的もしくはアブリオリな性格を目的論と等しいとみている。諸前提が与えられるならば、効用極大化過程の結果ないし目的は、必然的に達成される。

「限界効用理論はまったく静態的性格のものである。それはいかなる種類の運動の理論も提供しない。……この理論は、因果論的用語ではなく、目的論により引き出される。」<sup>17)</sup>

目的は「最高の快楽的な消費感覚の純集合体に達する」と快楽主義的に定義される。<sup>18)</sup>

### 4. ヴェブレンによる資本概念批判

ヴェブレンの新古典派資本概念批判は、彼の著作の至るところに散在しているが、*Q.J.E.* 論文の “On the nature of capital”, I & II, *Q.J.E.*, 22 (4) および 23 (1) に集中している。彼は資本の生産力にもとづく利子の装置と説明のような普遍的に用いられうる資本概念を拒否する。それに代ってヴェブレンは、蓄積する因果関係の歴史過程に求め、資本を社会の蓄積された技術・産業上の経験と考えている。現代経済学にとっては、資本は人間の用途に役立つ一定量の物的なものと考えられる。これは分類学の目的にとって十分なものである。

16) Veblen, *C.W.* VIII, p.191.

17) Veblen, *C.W.* VIII, pp.231-32.

18) Veblen, *ibid.*, VIII, p.250.

しかし、それは発展過程の理論にとって問題を考える有効な方法ではない。累積的变化過程で問題を考える場合には、これらの生産財は人間の知識、熟練、および偏好の実際であり、次いで産業の発展過程に入りこむようなものである。人間の手に入れうる物体の物理的財産は一定である。変化するのは人間の力であり、これらのもののどれが開発に役立つかに関するその洞察力と理解力である。機械的な案出物におきる変化は人的要因の変化の表現なのである。<sup>19)</sup>

ヴェブレンは、この蓄積された経験は共有財であると主張する。とはいえ、産業化は資本財の所有を、共通の知識と技能の有効使用にあらかじめ必要なものとしたのであり、資本家に所有者の支配力と収益を支配する力を与える。

資本の生産力の多くを作る人々に対するヴェブレンの反応は、

「すべての有形資産 (tangible assets) は、彼らの生産力と、彼らの所有権が所有者に独占させる非物的な産業上の方策に対する価値に負っている。

これらの非物的産業方策は必然的に社会の産物であり、社会の過去および現在の経験の非物的な残余財産である。」<sup>20)</sup>

この社会の「非物的産業方策」あるいは産業技術の状態への力点は、ヴェブレンの「有形資産」に対立する「無形資産」(intangible assets) としての資本への一般的力点の一部である。企業価値の多くは、その有形資産の生産力からではなく、のれんや独占力のような無形資産から生じる。資本への収益に関するヴェブレンの説明はまた、制度諸要因を含む——すなわち歴史的に固有の信用組織や、信用に影響する貨幣的条件、および、したがって、企業の資本化である。

「資本の概念は、本質的にビジネスに従事する人々の思考習慣であり、……これは企業社会における慣用の合意による慣例で決まる。……したがって、現代科学の使用のために、その役に立つ定義は、企業人の中でその時に通用している思考習慣を観察することによってのみ得られる。<sup>21)</sup>

---

19) *Op. cit.*, VIII, p.71.

20) Veblen, *ibid.*, VIII, pp.339-40.

21) Veblen, *Op. cit.*, X, p.150.



### III ヴェブレンと J.B. クラーク

クラークはヴェブレンの批判に応答していないため、ヴェブレンとクラークのやり取りを、ベーム-バヴェルクとの論争と同じ意味で「論争」と言うことはふさわしくないとと思われる。なぜなら、ヴェブレンはカールトン大学でのお気に入りの学生であったという、クラークの見解に対する彼の批判を、人としてのクラーク批判から切り離そうとしているからである。「クラーク教授の経済学」の第一頁で、ヴェブレンは、彼の分野で学生から愛されるだけでなく、注目されるたまものを賞賛している。しかし、批判者としては、クラークの研究を一般に適用している経済理論の一局面として非人格的に語るが必要であったらう。<sup>22)</sup>

クラークから直接の反応はなかったにもかかわらず、ヴェブレンの批判とクラークの立場は、やはり普遍的に適用可能な概念、資本対資本財、および静態均衡と動学として考えることができるであろう。

#### 1. 普遍的自然秩序 (a Universal Natural Order)

普遍的に適用可能な概念と現代の競争システムに作用する自然力を強調するために、クラークは『経済理論綱要』を「孤立した狩人」と自身のためだけに働く人間の経済という単純化された例示から始める。これに対して、ヴェブレンは、こうした推測的な経済人類学をもたず、クラークの例示を「非常に見かけ倒しの誤述」とのべている。ヴェブレンは物理的な生産装置としてよりも、むしろ社会に蓄積された技術的経験としての資本への力点を例示する実際の人類学的例示をもってしている。

「経済単位は「孤立した狩人」ではなく、ある種の共同体、すなわち、初期段階では、自分のために働く男性に代って、女性が最も重大を要因であったと思われる。そのような共同体——たとえばカリフォルニアの「根堀り」インディアンのような——が所有した「資本」は取るに足らない分量であった。他の誰よりも珍奇なものの収集者として価値あるものであった。その集団の生活が経済的に依存したものは、実にインディアンの女の

22) Veblen, *ibid.*, VIII, pp.180-81.

蓄積された智恵であった。かご、根を掘る棒、うすといった、ただ簡単な物的なものをなくすことは大したことではないが、土壌や季節、食物と繊維植物、機械的用具に関するインディアンの女の知識の考えられる喪失は、共同体の餓死を意味したであろう。」<sup>23)</sup>

この社会の「非物的産業方策」あるいは産業技術の状態は、「有形資産」に対する「無形資産」としての資本に対するヴェブレンの一般的強調の一部である。企業価値の多くは、その有形資産の生産力からではなく、のれんや独占力のような無形資産から生じる。資本収益についてのヴェブレンの説明も、制度要因——信用と、したがって企業の資本化に影響する歴史的に特有な信用組織や貨幣状態を含んでいる。

無形資産の重要性と歴史的な稀有な諸条件が与えられるならば、ヴェブレンにとって、資本は物理的装置の集合体としてではなく、特有のビジネス実践の歴史的観察によって定義されるのである。

この共同体では、この平凡な技術的知識を用いるのに必要な「資本財」は、取るに足らないものであり、実際、誰にも手のとどく範囲内にあった。これに対して、産業化が進み、大規模な資本財が生産に必要となるにつれて、これは財の所有者に、古代の人々の智恵と種族の蓄積された経験を買い占めることを可能にしたのである。

## 2. 資本と資本財

クラークは彼の「真の資本」——永続的で、同質で、展性をもち、完全に可動的である価値をもつ貨幣資産を、一般的に異質で特有の装置である資産財から区別する。ヴェブレンは用語を比較し、これらの用語を、「金銭的資本」(pecuniary capital)と「産業装置」(industrial equipment)という用語によってカバーされるであろう同一事実をまさにカバーする用語として記述している。それらはすべての普通の目的のためには、フィッシャー氏の「資本価値」(capital value)と「資本」(capital)という用語と一致している。

最初は 1895 年に、次いで 1899 年と 1907 年に現われる有名な例示で、ク

23) Veblen, *ibid.*, VIII, pp.184-85.

ークは、さまざまな一時的資本財の連続による「真の資本」の自由な流れを次のように記述している。

捕鯨船では木綿を紡がせることはできない。しかし、資本は、実際に、ニュー・イングランドの捕鯨から木綿紡績へと移転したのであった。船は朽ちるにまかせられ、それらに代って工場が建設されたのである。<sup>24)</sup>

この流れで、「資本は完全に可動的である。……実際、具体的形態を変化させることにより、こうして産業のグループ・システムのうちでその位置を変えることには限界はないのである。」<sup>25)</sup> 形態を変化させる無限の力のために、ークは、真の資本の資金がひとたび創出されると、それを永続的な「確固たる実体」(abiding entity) とみなしている。

「資本財」の転移を含まない「資本」の転移を語ることは、「資本」は「資本財」からなるという主要な見解と矛盾する。資本の「永続的実体」が存する連続性は所有権の継続であって、物理的事実ではない。この継続は非物的な性質、法的権利や契約、購買と販売をいうことである。

真の金銭的な資本対資本財・装置という理論的重要性を比較して、ークとヴェブレンは共に、資本財を強調していない。しかし、ークの言う真の資本の永続性に代って、ヴェブレンは資本の非物質的側面を強調している——すなわち、共同体の制度的な財産権や蓄積された産業上の技術や知識である。

ヴェブレンは次のように論じている。

「産業資本——生産要因と考えられる資本——は、本質的には技術的工夫の資本化である。……すべての資本の本質的な核は非物的富であり、……資本家の所有権の物的なものは、比較によって、一時的で偶然的な物体である。しかし、もしこのような見解が受け入れられるならば、資本家に対して、社会全体の無形資産の一定割合の独占化に対する衡平な収益として与えられるべきかを決定することは、極めて困難であろう。競争条件下で彼に実際与えられる収益は、共同体の技術的成果が達成される物的な工夫

24) J.B. Clark, "The Origin of Interest", *Q.J.E.*, 9(3), pp.302-35.

25) J.B. Clark, *The Distribution of Wealth*, p.118.

を合法的に手に入れることにより、彼が入手しうるさまざまな利点の尺度となろう。」<sup>26)</sup>

### 3. 静態均衡と動学

クラークの静態均衡は理論的単純化をこえており、すべての社会的変化は、最終的には静的均衡結果をもたらすという彼の信念に根ざしている。ヴェブレンはクラークから引用している。すなわち、

「一定時点での社会の現実の形はその時代の静的モデルではない。しかし、それはそのモデルに一致する傾向をもっている。そして非常に動的な社会では、変化の力がそれほど積極的ではない社会においてそうであるよりも、もっと静的モデルに近い。」

したがって、クラークでは、「社会が『動的』になればなるほど、それは静態モデルに近づく」<sup>27)</sup> ことになる。

ヴェブレンが正しく述べているように、クラークにとって、動態とは一定の結果としての均衡に至る途上の不完全と一時的不安定を大いに作り出すものである。最終結果は自然法によって決められる。

もちろん、ヴェブレンはこれに賛成しない。なぜなら、「クラーク氏によりせいぜい代表される線の経済学は、決して累積的变化の分野には入りこまない。それは現代科学に占める種類の問題——すなわち、発生、成長、変動、過程（要するに、動態の関係の問題——にはアプローチしない。」<sup>28)</sup>からである。

クラークは『経済理論綱要』において、時間を越えた世界の状態における歴史の差異に関して、(均衡への収束に反するものとしての) 経済動学への大ざっぱな踏みこみを試みている。しかし、彼の努力のほとんどすべては、静態と均衡への調整に集中しており、『富の分配』を終えるさいの次の信念の表明と一致している。「にもかかわらず、どのような運動を経済学の動学部門が発見し説明しようとも、静態法則は支配的であるのをけっして止めないであろう。運

---

26) Veblen, *ibid.*, VIII, p.200.

27) Veblen, *ibid.*, VIII, p.189.

28) Veblen, *ibid.*, VIII, p.192.

動の法則に関するすべての真の知識は休止の法則に関する適切な知識にかかっているのである。」<sup>29)</sup>

クラークは、ヴェブレンによるこうした批判のどれにも、印刷物で応答しなかったが、われわれはこの説明をドーフマンから得られる。すなわち、「この書評が現われたすぐあと、クラークはヴェブレンに会い、論文は少なくとも彼がなすべき二、三の訂正に注意をうながすとやった。クラークが去ったとき、ヴェブレンは、ある学生に向って、クラークは紳士だと言明した。」<sup>30)</sup>

#### IV ヴェブレンとフィッシャー

次に、フィッシャーに対するヴェブレンの批判を取り上げることにしたい。ヴェブレンは *Political Science Quarterly* で、フィッシャーの『資本所得の本質』(*The Nature of Capital Income*, 1906.) と『利子率』(*The Rate of Interest*, 1907) に対して、二篇の書評を書いている。

最初の書評から 1 ヶ月後に、フィッシャーは一時的に印刷物の形で反応することを申し出ている。なぜならば、私は急いだ仕事をしたくないからであり、一部には私は、彼がそうあるべきだと思うほど彼に不当ではないことを確かめるために、ヴェブレンとまず少し文通したいためである。たとえそれらの文通があったとしても、それは両者いずれの記録にも存在しない。フィッシャーは最終的に、ヴェブレンの第二の書評から二、三ヶ月後の 1909 年 9 月に応答している。

フィッシャーは、彼が 1907 年に『利子論』(*The Theory of Interest*) として改訂するとき、ヴェブレンの批判に答えている。

ヴェブレン対フィッシャーの資本論争を理解するためには、フィッシャーの書物における関連した議論を取りあげるのが有用である。フィッシャーにとって利子とは、将来財に対する現在財への打歩である。フィッシャーは、利子率を「将来所得のドルを超える現在所得のドルを求める選好指数」と定義する。彼は所得用役の顕著な役割りを、バーム-バヴエルクの理論を超える彼の打歩

29) J.B. Clark, *The Distribution of Wealth*, p.442. 田中・本郷訳、前掲、p.448.

30) Dorfman, J. *Thorstein Veblen. and His America*, New York : A.M. Kelley, p.284.

理論の主要な前進と考えている。<sup>31)</sup>

フィッシャーの利子論は、彼の資本と所得の理論の上に立てられている。その資本・所得理論は、物理的数量に用いられたストック／フローの区別をもって始まる。富としての資本は一定時点で現存する実際の物理的物体のストックである。所得としての用役は、われわれ人間に抵触する資本ストックからの実際の消費役のフローであり、……滋養物、衣服、住居、娯楽品、虚栄心を満たすもの、その他の種々雑多なものからなっている。<sup>32)</sup>

利子は、富としての資本 (capital-wealth) と用役としての所得 (income-services) とはまったく公約数をもたない。……したがって、両者が共通の基準に帰されるまでは、それらの間に「利子率」は存在しない。<sup>33)</sup>

資本と所得を比較するために、分析は物理的数量から価値にシフトしなければならない。

利子率決定の主観的要因と投資機会決定の客観的要因について、フィッシャーは次のように述べている。すなわち、現在の富としての資本は将来の所得用役を生み出す。それらの用役は、それらが将来の所得価値を生み出す期間に価格づけがなされる。

将来用役を割引くのに用いられる利率には二つの決定要因がある。それは (1) 主観的な不耐忍と (2) 投資機会 (investment opportunity) を決定する客観的諸条件である。生産と貸付基金市場によって、個人は、所得の流れの時間形体を修正する選択的投資機会の間で選ぶことができる。こうした流れは、ベーム-バヴェルクの増大する迂回生産に対する収益逓減と同等物をもっている。フィッシャーは図表により、投資機会の範囲を「主観的時間選好率を反映する「望ましさ」(desirability) 曲線と結合する。生産は最大の現在価値の所得の流れで生じるが、しかし貸付市場で彼の所得の流れを調整することにより、個人は最大の望ましさをもつ所得の流れで消費することができる。フィッ

31) Fisher, Irving. *The Rate of Interest : Its Nature, Determination and Relation to Economic Phenomena*. New York : Macmillan, 1907. p.vii.

32) Fisher, I. *The Rate of Interest, op.cit.*, p.90.

33) Fisher, I. "The Role of Capital in Economic Theory", *Economic Journal*, 28(7), pp.526.

シャーにとって、「利子は、一部は機会の範囲を与える客観的ないし技術的諸要因によって、一部は個人的に選択（望ましきの曲線）を決定する主観的諸要因によって決定される。」<sup>34)</sup>

## V ヴェブレンのフィッシャー批判

ヴェブレンの書評はあいまいな賛辞に満ちており、フィッシャーの著書を限界効用学派が提供しなければならない最高のものとして賞賛している。

しかしながら、それは、そのアプローチのもつ欠点のすべてをわけもつていと彼は言う。

「フィッシャー氏の著書は最高のものである——思慮深く、注意深く、賢明で、徹底した、明晰な、不屈なまでに論理的である。それに欠けているものは生命の息吹である。」<sup>35)</sup>と評している。

フィッシャーによれば、ヴェブレンの批判は、その大半が方法論と諸概念に関する批判であり、他の書物から自分の書物を区別する特種な結論を無視しているとしている。<sup>36)</sup>

彼らの論争では、結局、実質的問題は次の三点であった。すなわち、(1) 快樂主義的・個人主義対金銭的・制度的諸概念の使用と、(2) 分類学の役割り、ならびに (3) 迂回の役割りである。

まず、快樂主義的概念対金銭的・制度的諸概念について取上げる。

ヴェブレンの主張によれば、資本、所得および利子は金銭的概念であり、金銭的状况の変化と金銭事情を処理する方法の変化に対応して変化する。彼によれば、フィッシャーの失敗は、金銭的概念に代って快樂主義的概念を使用することにあると。

ヴェブレンは、フィッシャーによる富としての資本（生産財）と資本価値（金銭的資本）との区別に注目している。資本価値は、消費される効用の形で

34) Fisher, I. *The Rate of Interest*, *op.cit.*, p.411. フィッシャーはこれを付録で図示しているが、ここでは省略する。

35) Veblen, *ibid.*, X, p.148.

36) Fisher, I. “Capital and Interest”, *Political Science Quarterly*, 24. Sept. pp.504-516.

所得用役を与える確実な「快樂主義的概念」である。

ヴェブレンは、フィッシャーが資本価値の概念に移動し、「資本化現象の快樂主義的構成を金銭的構成に代えることを認める。しかし、ヴェブレンが彼の快樂主義的な分類で矛盾しているのを批判する場合、フィッシャーは逃れることができない。フィッシャーの所得用役は心理的所得であり、貨幣所得という金銭的概念に帰すことはできないと、ヴェブレンは主張している。

ヴェブレンにとっては、利子は「顕著に金銭的現象であり、利子率はビジネス上の調整の問題である。」<sup>37)</sup>

彼の主張によれば、終始一貫した利子率は、貨幣経済と信用取引の歴史的発展に特有な現象である。

「利子現象は財産制度の成熟した発展によって与えられた基礎の上のみ生じうる。問題のすべては、文明の比較的短い局面の間でのみ見出される一定の制度状態の範囲内にある。……要するに、利子はビジネスの問題であり、ビジネスによってのみ説明されるべきものであり、フィッシャー氏がやろうとしているような生計によるものではない。」<sup>38)</sup>

フィッシャーはこれに対して、古典的な反論を与えている。すなわち、反理論的である基礎的概念よりも、むしろ実際のビジネス慣行の記述に焦点を合せている。彼の目的は、利子率に対するすべての影響力を包括的に説明するものではない。その代りに、「純粋な経済理論」における彼の研究——それは経験的、歴史的証拠が補いうる——は、「作用する根本的あるいは基礎的な諸力を孤立させること」<sup>39)</sup>を目的とするものである。

「ビジネスの主張として、貨幣所得によって評価され得ないものは、けっして所得とは見なされ得ない。……金銭的概念を超えて、あるいはその向こうにある現代使用する所得の定義は役にたつものではない」というヴェブレンの陳述を引用した後に、フィッシャーは、これに反批判を加えている。彼の主張によれば、

---

37) Veblen, *ibid.*, X, p.141.

38) Veblen, *ibid.*, X, p.142.

39) Fisher, I. *The Theory of Interest, op.cit.* p.487.



「事物の貨幣的うわべに注目し、その下にある心理的諸力を軽視するヴェブレンの方針をとれば、それは経済学者を、経済学が始まった表面的な重商主義に立ち戻らせることになる。」<sup>40)</sup> としている。

制度的限定に関して、フィッシャーは、制度を個人の効用と同じ根本的心理的諸力の結果とみている。

「制度や慣習は、ビジネスに似て、人々が暮らし方から得る満足を増大させるために彼らによって作り出されてきた。こうした人間が作った、人間が管理する制度はよりたやすく、より豊富に彼に満足を作り出すために、人間によって工夫された単なる道具にすぎない。」<sup>41)</sup> としている。

フィッシャーは、分析を歴史的な個々の特有な制度的コンテクストに限定し、彼の根本的信念である普遍的原理を再確認するヴェブレンの要求を明白に拒否している。

「不耐忍と機会はビジネス制度の活動において作用しており、人々はこうした刺激と状態の支配を逃れることはできない。……したがって、利子は明白な、あるいは契約としての現象に限定され得ないのであり、現在と将来に含まれるすべての取引きと人間の活動に固有のものであるにちがいない。」<sup>42)</sup>

## 1. 分類学

ヴェブレンは、フィッシャーの資本・所得概念を、実際のビジネス慣行の観察から生じるよりも、むしろ分類学的なものとして軽視している。ヴェブレンは同様に、フィッシャーの 1906 年の書物を「分類学、定義および類別の著書」<sup>43)</sup> と片づけている。

フィッシャーは、分類学は適当でないというヴェブレンの見解に心から賛成することができ、問題の著書から引用している。すなわち、「分類ではなくて分析が科学的問題を関係する。」<sup>44)</sup> と。

---

40) Fisher, I. *Political Science*, 1909, 24, p.506.

41) Fisher, I. *The Theory of Interest*. p.490.

42) Fisher, I. *op.cit.*, p.490.

43) Veblen, *ibid.* X, p.148.

44) Fisher, I. *ibid.*, p.7.

フィッシャーにとっては、具体的事物の分類は相対的に重要ではないが、分析は「事物の間の抽象的諸関係」についてである。富の定義と分類についてのヴェブレンの苦情を無視して、「重要なポイントは富のストック間の関係であり、……その用役のフローである。」<sup>45)</sup>と言う。

資本の分類に含まれるか排除されるものが何であれ、重要な分析的問題は、資本と所得のカテゴリー間関係にかかわる。

フィッシャーとヴェブレンは、彼らが分類学の定義を異にするためだけゆえに賛成しようと思える。フィッシャーが標準的な定義を用いているのに対し、ヴェブレンの定義には、均衡における事物と行為者との間の抽象的関係が含まれる。ヴェブレンにとっては、目的論的、快楽主義的な均衡概念に基づく抽象的カテゴリー（例えば、資本と所得、労働と賃金といった）は、たとえカテゴリー自体よりも、カテゴリー間の抽象的関係が強調されても、無効である。これはフィッシャーとヴェブレンがすれ違うところである。両者は単なる分類は重要でなく、諸関係あるいは諸過程が根本的だということに賛成する。しかし、ヴェブレンは、フィッシャーの理論的関係を拒否する。なぜなら、それらは、因果論的、発生的過程よりはむしろ、静的な均衡の枠組の概念と結びついているからである。

## 2. 迂回性 (Round aboutness)

ヴェブレンはフィッシャーの迂回性概念について、説得力の弱い批判を行なっている。

「迂回過程のもついわゆる、より大きな生産性は、利子の打歩理論とは相容れなくする技術的な現象である。」<sup>46)</sup>それは快楽主義的計算に直接根ざしているから、あるいは、それはせいぜい、「第二義的な主張」であるからである。

これに対するフィッシャーの反応としては、ヴェブレンは『利子率』の主要点をまったく見落としているというものである。すなわち、バーム-バヴェル

45) Fisher, I., "Capital and Interest", *Political Science Quarterly*, 24, p.508.

46) Veblen, *op. cit.*, X, p.139.

クの「迂回過程」の議論で地位を占める、「所得のフローの時間の種類」によって果される役割りである。これに代って、彼は技術論的要素になんらの場も見出さない。フィッシャーの著書の有名な「迂回過程」における技術論的側面に関するベーム-バヴェルクの取扱いは、各個人は、大きさ、構成、安定性、時間の種類を異にする任意の所得をもつという事実によって代えられねばならないことを示すために書かれたのであった。付録で、利子率に対するこうした技術論的限界の影響は分析的に、また図によって示された。<sup>47)</sup>

ヴェブレンに対する公明正大さから、『利子率』におけるフィッシャーの説明は、彼が利子の不耐忍理論を単独に提供したことを信じさせた。しかし、ヴェブレンに対するフィッシャーの反応は、正当化されるであろう。利子論が原理上、主観的説明と客観的説明を結合しえない理由は存在しないとされたからである。

われわれは、ヴェブレン、クラーク、フィッシャーの間の論争において、6つの主要問題を確認し、それらをヴェブレンの新古典派理論に対する全般的批判という文脈に位置づけた。すなわち、(1) 資本は自然法の普遍的原理に支配された物的生産装置と考えるか否か、(2) 金融上の資本と資本財の区別、および(3) 経済分析のための静態均衡の枠組の適切さである。フィッシャーとの論争では、論争は、(4) 快樂主義・個人主義対金銭的・制度的概念、(5) 分類学対理論分析の役割り、および(6) 利子理論における迂回性の役割りである。以上6つの問題点となる。

資本論争は、物理的資本概念と価値資本概念との間の緊張のうちに起きる。モデル化の目的のために、1つの概念は他の概念を比較的軽視して強調される。

### 3. 資本論争における3つの重要問題

最近100年の大半の資本論争、すなわち、ベーム-バベルク、クラーク、およびフィッシャー間の論争、1930年代におけるハイエク、ナイト、カルドア間の論争、および2つのケンブリッジ間の論争であり、他の諸論争の繰り返されるカテゴリーは、まだヴェブレン、クラーク、フィッシャーの論争にも当て

47) Fisher, I. "Capital and Interest", *P.S.Q.*, 24, pp.513-14.

はまることを主張するものであった。

こうした観点から見れば、最近 100 年の大半の資本論争は、3 つの主要なカテゴリーに入ると思われる。1. 産業資本主義社会を分析する上での資本の意味と測定、2. 均衡は資本蓄積と分配過程を分析する適当な道具であるのか否か、3. 単純なモデルの結果が賢明でない場に、論争に油をそそぐ上でのイデオロギーとヴィジョンの役割りである。ヴェブレン、クラーク、フィッシャーのやり取りにおいて、論争はいかにこうした共通のカテゴリーに当てはまることになるのであろうか。

### 1. 資本の意味と測定

このカテゴリーは、資本は金融的資本を意味するのか、あるいは資本財を意味するのかという問題をカバーする。そして、もし資本収益が物理的限界生産物、ないし財産権と経済的権威から生じるのであれば、それは資本家が生産において創り出した剰余の分け前を受け取ることを許すことになる。当然の結果は、利子率と資本量との間の、やっかいな相互依存を与えられた資本をいかに測定するかである。

ベーム-バヴェルクがクラークとフィッシャーの両者との論争において、ベーム-バヴェルクが物理的資本財を強調し、これに対して、クラークとフィッシャーは資本の金融的基金の側面を強調した。クラークの「真の資本」——永続的で、同質的で、展性を持ち、完全な可動性をもつ——は、異質的資本財間の差別を破壊する真の資本を強調するにもかかわらず、クラークは資本収益を彼が普遍的な自然法原理だとみなす限界生産力によって説明することになる。

ヴェブレンは、資本と資本財の代りに、金銭的資本と産業装置という用語を使用している。クラークと同じく、彼は資本財を強調しない。しかし、無形資産、過去および現在の非物的な産業上の工夫や、「企業に従事する人々の思考習慣と考えられる資本」に賛成している。クラークの「真の資本」の永続性に代って、われわれは、共同体間の知識の産物の多くを資本家に専有させる制度的財産権をというヴェブレンの言う「永続する実体」をもっている。

フィッシャーは、一部、物理的資本財の技術的生産力に利子率の根拠を与えるベーム-バヴェルクを継承する。ヴェブレンは「迂回性」による説明を拒け、

資本収益の源泉を資本財所有者による共同体の技術的な専門知識の独占に求め  
ている。

## 2. 資本蓄積の均衡分析がもつ妥当性について

金融的価値と物理的装置の両方としての資本の二重性格から、資本論争はし  
ばしば、蓄積と分配の動態過程はいかにして本質的に静態均衡の枠組の範囲内  
で分析できるのかについての論争に発展していった。

ベーム-バヴェルクは、迂回生産過程における物理的装置の役割りを強調し、  
クラークの真の資本概念と静態的均衡状態を「資本の神話」と批判した。資本  
の金融的側面に対するフィッシャーの強調は、彼を一方方向の「因果」的説  
明の必要に対するベーム-バヴェルクの批判に反対する均衡モデル化を弁護さ  
せた。

ヴェブレンとクラーク／フィッシャー間の論争において、ヴェブレンはク  
ラークの静態均衡の枠組みを拒否し、制度と歴史が支配的であり、個人が根本  
的な分析単位ではない、累積的な因果的結果の分析を弁護した。ヴェブレンの  
均衡論批判は、ベーム-バヴェルクの批判だけでなく、オーストリー学派の過  
程に関する因果論的発生的説明を大いに分けもっている。しかし、ヴェブレン  
は、オーストリー学派の説明が快樂主義的な効用極大化の目的論に根ざしてい  
るという主張のうちに、彼の立場の違いを明らかにしている。すなわち、オー  
ストリアグループは過程の理論から離れたが、やがて後には完全に止めてし  
まった。なぜなら、彼らが忙しく従事した過程は、彼らの理解では、累積的な、  
あるいは展開する結果を説明するものではなかったからである。

ヴェブレンは続けて、次のように主張している。すなわち、「オーストリー  
学派が失敗した理由は、人間性の誤った概念にあると思われる。」<sup>48)</sup>と。

したがって、これに続く「快樂主義的な人間観」について、ヴェブレンは次  
のように述べている。それは、

「計算機のようなものである。こうした人間は、その領域に彼を移す刺激  
の衝動のもと、幸福願望の同質的血球のように振動するが、そのまま手を

---

48) Veblen, *ibid.*, VIII, p.73.

つけずに放置するのである。」<sup>49)</sup>

ヴェブレンはまた、彼の立場を、展開過程の発生的説明ではなくて、現象の物語風な調査を与える歴史学派とも異なるものと見ている。<sup>50)</sup>

快樂主義的・個人主義的概念対金銭的・制度的概念の使用に関するフィッシャーとの論争もまた、このカテゴリーに入る。ヴェブレンの主張によれば、資本、所得、利子の概念は金銭的なものであり、制度的文脈と共に変化する。ヴェブレンは、フィッシャーの均衡を基礎とする快樂主義的な自然法概念は金銭的なものであり、制度的文脈と共に変化する。ヴェブレンは、フィッシャーの均衡を基礎とした、快樂主義的な自然法概念は、累積的因果論的説明を与える仕事には至らないと思っている。とは言え、フィッシャーは自分のアプローチを抽象的、理論的分析に必要なアプローチであると弁護し、過度に詳細な制度的概念を危くするかもしれない概念の単なる記述を避ける。これに関連したフィッシャーとヴェブレンとの間の分類学論争は均衡分析の適切な役割りの問題と結びつく。ヴェブレンはフィッシャーの概念、概念間の関係の抽象的・理論的分析でさえ拒ける。なぜなら、これらの概念は、ヴェブレンが欠点をもつ目的論的、快樂主義的均衡概念とみなすものに基づいているからである。

### 3. イデオロギーの役割り

20世紀初期の資本論争において、ベーム-バヴェルク、クラーク、フィッシャーは、資本の収益には、労働の取奪が含まれるというマルクスの理論（あるいは、ヘンリー・ジョージのような同時代のマルクスの思想の主張者たち）への反論に意識的に従事していた。賃金と利子は、それぞれ労働の限界生産物と資本の限界生産物から生じる価格にすぎないという、クラークの反応は、「ある社会階級が取得するものは、自然法のもとでは、その階級が産業の全生産物に貢献するものである」との彼の主張に最もよく表現されている。

それから30年以上後に、フィッシャーは、利子理論をめぐるイデオロギー論争の継続を確認している。すなわち、「利子の道徳的、経済的問題に関する論争は何世紀も続き、今なお盛んに行なわれている。マルクス主義的社会主义

49) Veblen, *ibid.*, VIII, p.72.

50) J.B. Clark, "Distribution as determined by a law of rent", *Q.J.E.*, 5(13), p.312.

者と共産主義者を除けば、まず満場一致して賛成を得ているのは、利子の取得は道徳的に正しく経済的に健全であるとされているが、それでもなお、多くの混乱と、利子を創り出し、それを必要とする諸原因の経済学的説明に関する意見の大きな相違が残っている。

ヴェブレンはクラークの限界生産力理論を拒け、それに代って、利潤は制度的に資本家の社会的権力に根ざしており、彼らが全体としての社会の技術的成果を占有させようのであるとしている。クラークとフィッシャーは、この問題に関してヴェブレンとの論争に加わることはけっしてしなかった。

イデオロギーは 1930 年代の論争では歴然たるものではなかった。しかしケンプリッジ論争で、ジョアン・ロビンソンは、イデオロギーの役割りを明らかに引き起こす少数の人々の一人であり、ヴェブレンに同性質の精神を見ていた。彼女は、ヴェブレンと同じく、資本の重要な意義は資本家に対して、資本家階級の所有する財産にあると解釈し、その所有権は生産過程で創出された剰余の分け前にあずかる法的権利と経済的権威を与えるのであると解している。

## むすび

ヴェブレンにおいて引き起こされ、クラークとフィッシャーに続いて取上げられた論争は、前世紀の他の主要な資本論争に共通した三つの論点に明らかに入る。すなわち、1. 産業社会を分析するうえでの資本の意味と測定、2. 資本の蓄積と分配過程を分析する適切な用具であるか否か、3. 単純なモデルが賢明でない場合に、論争に火をくべるイデオロギーとヴィジョンの役割りであると言えるのではなかろうか。